

論文

# 制度的場面における多人数相互行為の 終了に関する研究

—— 中国の大学における日本語授業を分析対象に ——

黄 潔

湖南科技大学講師・広島大学大学院文学研究科博士課程後期

A Study of the Closing Section of Multi-Person Interaction in Institutional  
Settings: Analysis of Japanese Lessons in Chinese Universities

HUANG Jie

**Abstract:** Taking a multimodal perspective, this study analysis the closing section of multi-person interaction in an institutional setting, where Japanese lessons conducted by three Japanese teachers and three Chinese teachers in Chinese universities are involved. Data were collected through the form of audio, video, and transcription. Results of this study are as follows: (1) the closing section of the Japanese lesson is constituted with two stage structures, that is “pre-closing” and “closing”. Moreover, the components of these two stages are somewhat solidified, (2) in both the “pre-closing” and the “closing” stages, the leader is the teacher, who practice a variety of verbal and non-verbal behaviors to guide the interaction with the students until the end of the lesson. Correspondingly, the students use a variety of non-verbal behaviors to indicate their agreements or disagreements with the teacher’s intention to end the lesson, (3) there are two main patterns of procedures used by teachers in the “pre-closing” stage. One is creating a negotiation space by which students’ attitudes towards ending the lesson could be confirmed. The other one is to use “discourse marker” to unilaterally terminate the interaction with students, (4) utilizing various “discourse markers”, the “closing” is constructed by teachers into different phases. The teacher can appropriately adjust the progress of the lesson’s “closing” by evaluating students’ non-verbal behaviors in each phase.

**Keywords:** Institutional Settings, Multi-person Interaction, Japanese Lessons, the Closing Section, Multimodal

## 1 はじめに

われわれが生活の中でしばしば体験する相互行為の終了は、特段意識されることは少ないが、実際にそこで行われていることは単純ではない（居關 2017:51）。それは、参加者が用件を済ませ、言語・非言語行動による一連の交渉によって、それまで継続してきた相互作用を停止させるというプロセスを伴うものなのである。

相互行為は、大きく日常の場面で行われるものと、制度的場面<sup>1</sup>で行われるものに二分される。また、後者は原則として「全体的構造 (overall structure)」<sup>2</sup>を持ち、前者に比べ、より明確な開始と終了がある (Hakulinen 2009:58)。本研究は、こうした制度的場面における相互行為の終了に着目し、そのメカニズムを解明するために、実際の日本語授業の会話データをとり上げ、マルチモーダルな視点から分析を行う。具体的には、1) 授業の終了部はどのように構成されているか、2) 参加者は授業を終了させるためにどのような手続きを用いているか、という2つの問題を明らかにすることを目的とする。

## 2 会話の終了に関する先行研究

### 2.1 Schegloff & Sacks (1973) による「2段階構造」説

会話がどのように終了するかという問題の検討に大きく貢献したのが、Schegloff & Sacks (1973) の研究である。彼らは電話での会話を対象に考察し、会話の終了部 (closing section) を「ある話し手の発話の完了が、他の人の話す機会にはならず、また、それがその話し手の沈黙としても聞き取られないことがないような時点で、会話の参加者同士が同時に到達すること」だと定義づけた。また彼らは、終了部を「pre-closing (前終結)」<sup>3</sup>と「closing (終結)」という2つの部分に分けた。「pre-closing (前終結)」とは、会話参加者が終了部を開始するために初めに行うことであり、相互に終了する意図を確認しあう段階である。終了に関する合意が達成されれば、「closing (終結)」が開始されることになる。「closing (終結)」とは、「pre-closing (前終結)」の部分が終わった後から、会話参加者間の「最終発話交換 (terminal exchange)」<sup>4</sup>までの、会話を終結させる部分である。

## 2.2 Clark & French (1981) による「3段階構造」説

Clark & French (1981) は、Schegloff & Sacks (1973) の論の修正を試み、終了部を以下の3つの部分に分けた。1) 「topic termination (話題終結)」: 「pre-closing」の声明とその応答からなる段階<sup>5</sup>、2) 「leave-taking (いとまごい)」: 「topic termination」の後に続き、最終発話交換までを含む部分、3) 「contact termination (接触終結)」: 電話を切る行為。Schegloff & Sacks (1973) と比較して、Clark & French (1981) が進歩したのは「leave-taking」の創出である。それは、「reaffirmation of acquaintance (人間関係の再確認)」という、会話終結による参加者の一時的な社会的接触の断絶がもたらす、参加者間の関係へのマイナスの影響を補う機能を持っている<sup>6</sup>。

## 2.3 日本語会話の終了に関する先行研究

Schegloff & Sacks (1973) と Clark & French (1981) の論に基づき、会話終結のメカニズムや他言語における会話終結の仕方との比較などの課題をめぐって、日本語会話の終了部に関しても、様々な研究が行われてきた。これらの研究を会話の種類別に分類してみると、主に以下の6つに分けられる。1) チャット会話<sup>7</sup>、2) 電話会話<sup>8</sup>、3) 対面場面における自由会話<sup>9</sup>、4) モデル会話(ロールプレイ)<sup>10</sup>、5) 体験談や物語<sup>11</sup>、6) 制度的場面の会話<sup>12</sup>である。しかし、これらの先行研究においては、日常会話を対象とするものが大半であり、「制度的文脈に生じた会話(授業、法廷、診療などの場面における会話)については、終結という観点からはほとんど扱われてきていない」(居關 2017:52)。また、分析の対象として、会話終結に用いる言語的要素のみを扱っているものが多く、非言語的要素をも分析の視野に入れているものは大谷(2018)、広田(2002)の2論文しか見出せない。しかも、この2論文は全て日常会話を研究対象としている。こうした状況を踏まえて、本稿は制度的場面である日本語授業における相互行為を取り上げ、言語・非言語要素ともに考察し、その終了のプロセスを解明する。

## 3 研究方法

### 3.1 分析対象とするデータ

2019年2月下旬から3月下旬まで、中国の大学で日本語授業の取材(録音、録画など)を行った。本稿の考察に用いるデータはその時取材した授業から

日本人教師3人と中国人教師3人の合計16コマの授業を選んだものである。データの文脈の多様性を確保するために、初級から上級までの様々な科目を対象とした。考察用データの概要を以下の表1にまとめる。なお、調査対象者のプライバシーを守るため、対象者の名前を符号化する。

表1 分析対象とする授業の概要

レベル		授業名	取材期日	担当教師
初級	授業A	日本語音声	2019年2月26日	日本人教師A(女性)
	授業B	初級日本語精読	2019年3月1日	中国人教師A(男性)
	授業C	初級日本語精読	2019年3月6日	中国人教師A(男性)
	授業D	日本語会話	2019年3月8日	日本人教師B(男性)
	授業E	日本語音声	2019年3月12日	日本人教師A(女性)
中級	授業F	日本語作文	2019年2月25日	日本人教師A(女性)
	授業G	日本概況	2019年3月5日	日本人教師B(男性)
	授業H	日本語作文	2019年3月4日	日本人教師A(女性)
	授業I	中級日本語精読	2019年3月6日	中国人教師B(女性)
	授業J	中級日本語精読	2019年3月7日	中国人教師B(女性)
上級	授業K	上級日本語精読	2019年2月27日	中国人教師C(男性)
	授業L	上級日本語精読	2019年2月28日	中国人教師C(男性)
	授業M	日本歴史	2019年3月4日	日本人教師B(男性)
	授業N	上級日本語視聴説	2019年3月6日	日本人教師C(女性)
	授業O	ビジネス日本語会話	2019年3月19日	日本人教師C(女性)
	授業P	ビジネス日本語会話	2019年3月20日	日本人教師C(女性)

### 3.2 トランスクリプションの書き方

本研究で用いる断片(トランスクリプション)の書き起こしについて、言語的資源の表記は主に Jefferson (2004) による転記方法を、非言語的資源の表記は主に Mondada (2007) による転記方法を利用する。具体的には以下のようになっている。

言語的資源の表記

[ ]	オーヴァーラップ（重なり）	=	間隙なしに発話が続けられる
(数字)	間隙の秒数	(.)	感知可能な間隙（0.1秒前後）
:	音の引き延ばし、コロンの数は相対的長さ	¿	直前部分が疑問符（?）より弱い上昇調の抑揚で発話
?	直前部分が上昇調の抑揚で発話	.	直前部分が下降調の抑揚で発話
° 文字°	弱められて発話	<u>文字</u>	下線部分が強調されて発話
(h)	発言しながらの笑い	hh	呼気音、hの数は相対的長さ
.hh	吸気音、hの数は相対的長さ	¥	囲まれた部分が笑いを含んだ声で発話
(……)	まったく聞き取れない部分	< 文字 >	前後に比べてゆっくりと発話
> 文字 <	前後に比べて速く発話	( 文字 )	聞き取りに確信が持てない部分
{ 文字 }	中国語での発話		

非言語的資源の表記

Ss	不特定多数の学生	SA	全ての学生
Sx	某学生、xはその学生の姓の略称	視	視線
身	視線以外の身体動作		
(以上の非言語的資源の表記記号は筆者が作成)			
*	動作の開始と終了	---	動作の継続
-> 又は >-	発言行をまたいで動作が継続	>>	発言開始時よりも前から動作が継続
<<	発言終了時より後に動作が開始	,,,	視線の移動
- 文字 -	動作が中断し、軌道などが変化		

## 4 分析

### 4.1 日本語授業終了部の構成要素

制度的な場面での相互行為を可能にするのは、日常会話への参加を通して得た基本的なコミュニケーション能力である（高木 2005:143）。それゆえ、制度的場面である日本語授業の終了部においても、日常会話の終了と同じく2段階構造——「前終結」と「終結」という2つの部分が出現している。まず、本研究の対象授業から観察された「前終結」と「終結」の構成要素を以下の表2にまとめる。

表2 日本語授業終了部の構成要素

構造	授業A 終了部の流れ	授業B 終了部の流れ	授業C 終了部の流れ	授業D 終了部の流れ
前終結	最終話題や活動の完了	全体のまとめ	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了
終結	終結宣言 礼儀的決まり文句	終結宣言 再接触への言及 終結宣言 礼儀的決まり文句	授業後の作業への言及 再接触への言及 終結宣言 礼儀的決まり文句 授業後の作業への言及 別れの挨拶	終結宣言 再接触への言及 別れの挨拶
	授業E 終了部の流れ	授業F 終了部の流れ	授業G 終了部の流れ	授業H 終了部の流れ
前終結	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了	全体のまとめ	最終話題や活動の完了
終結	授業後の作業への言及 礼儀的決まり文句	終結宣言 授業後の作業への言及 終結宣言 (失敗) 授業後の作業への言及 再接触への言及	再接触への言及 終結宣言 別れの挨拶	終結宣言 再接触への言及 終結宣言 礼儀的決まり文句
	授業I 終了部の流れ	授業J 終了部の流れ	授業K 終了部の流れ	授業L 終了部の流れ
前終結	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了
終結	授業後の作業への言及 再接触への言及 終結宣言 礼儀的決まり文句	終結宣言 礼儀的決まり文句 授業後の作業への言及 別れの挨拶	終結宣言 授業後の作業への言及 終結宣言 礼儀的決まり文句	終結宣言 再接触への言及 終結宣言
	授業M 終了部の流れ	授業N 終了部の流れ	授業O 終了部の流れ	授業P 終了部の流れ
前終結	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了	最終話題や活動の完了
終結	終結宣言 再接触への言及 別れの挨拶	終結宣言 授業後の作業への言及 再接触への言及 授業後の作業への言及 新話題の挿入 終結宣言 礼儀的決まり文句	再接触への言及 終結宣言 礼儀的決まり文句	再接触への言及 授業後の作業への言及 終結宣言 礼儀的決まり文句

表2から分かるように、日本語授業における「前終結」は「最終話題や活動の完了」或いは「授業全体のまとめ」という形式で出現していて、「終結」は「終了宣言」、「授業後の作業への言及」、「再接触への言及」、「礼儀的決まり文句」、「別れの挨拶」という5つの要素の多様な組み合わせによって構成されている。「終結」部分の5つの要素の出現回数及び順序は任意であるが、「終結」の「最終交換」として、「礼儀的決まり文句（例：お疲れさまでしたーありがとうございました）」、「別れの挨拶（例：さようならーさようなら）」

という形式で出現するのが一般的である。また、授業の終了部が一旦開始されても、何かの話題が突然導入され、終結への進行が一定の時間にわたって中断されることもある（例：授業N）。

## 4.2 授業の終了に用いる手続き

### 4.2.1 「前終結」の完了——終了部という空間を開始させる手続き

居關（2017）は、「日常会話の終結における手続きの一つとされる前終結は、話題の終局で、相手に対し話題導入の機会を与える働きを担い、終結に進むか否かの交渉を行うもの」と述べている。それに対して、制度的場面における「前終結」はどのようなものであろうか。

#### 4.2.1.1 日本語授業の「前終結」に用いられる資源

坂本（2017）は、「会話参加者は相互行為の過程において、様々な言語的特徴・非言語的特徴をリソース（resource）として手がかりを得て会話を構築していく」と指摘している。本節においては、まず授業の「前終結」を構築する言語・非言語資源に関して考察する。以下の表3に、対象授業で観察された「前終結」に用いられる言語・非言語資源をまとめる。

表3 日本語授業の「前終結」に用いられる資源

構成要素	行為者	言語・非言語資源 ( < > : 出現しない場面がある)	対応する授業	言語資源の具体例
最終話題や活動の完了/全体のまとめ	教師 (終結意向の表明)	<b>【言語資源】</b> ① <終了の予告> + 最終話題の収束 + <理解の確認> + マーカー <sup>14</sup> ② マーカー + 活動完了の確認 + マーカー ③ マーカー + まとめ + マーカー <b>【非言語資源】</b> <b>視線：</b> ① 学生/教卓の方（二者間で移動） ② 学生/教材（二者間で移動） ③ 学生/教材/黒板（三者間で移動） ④ 学生/教材/携帯（時計）（三者間で移動） <b>身体動作：</b> ① 教壇/教卓の方へ戻る ② 教材のページを捲る ③ 時間をチェック（携帯で）	<b>【言語資源】</b> ① ACFHIJKLMNOP ② E ③ BDGK <b>【非言語資源】</b> <b>視線：</b> ① AEG ② CDHIJKLMNOP ③ B ④ F 身体動作： ① AEG ② O ③ F	① 後少しね…… いいですね？ / よろしいですか？ (0.48) はい ② じゃあ皆さん 大体書きましたか？ (0.23) え:: ③ はい (0.15) 今日 は……しました (0.33) じゃあ

最終話題や活動の完了/全体のまとめ	学生 (同意/ 非同意)	<b>【非言語資源】</b> <b>視線：</b> ①机の方（教材など） ②机の方／教師 ③机の方／隣の人 ④机の方／教師／他の学生 <b>身体動作：</b> ①メモをする ②教師による活動完了の確認への反応（活動を続ける） ③隣の人と情報交換	<b>【非言語資源】</b> <b>視線：</b> ① CDEIJLN ② ABGHKMP ③ F ④ O <b>身体動作：</b> ① ACFGHIJL ② E ③ F	—
-------------------	--------------------	---	--	---

表3から分かるように、授業の「前終結」は教師側が主導している。授業の「前終結」において、教師は様々な言語・非言語資源を用いて、学生との相互行為を終結へと向かわせる意向を先に表明する。それに対して、学生側は言語的発話順番をパスしているが、多様な非言語資源で終結への教師の意向に対する同意・非同意を表明する。以下では、そうした「前終結」部の展開を、3つの事例を用いて具体的に考察していく。

#### 4.2.1.2 日常会話の「前終結」に類似する事例

断片① 学生の意向表明の機会が明示される「前終結」（授業N）

説明：教師は教卓の裏側に座っていて、教材に書かれている練習問題について学生と答え合わせをしている。次は最終問題の答え合わせの終了部分から始まる断片である（授業の終了ベルが鳴る2分8秒前から）。		表3に対応する資源	終了部の構成要素
01	T T 視 SA 視	<b>【前略】ええバツ (0.08) そうですそうですその通りですバツということになります (.) OKですね? (2.11)</b> >Ss,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,, 右 Ss,,,,, down 教材 > >机----->	言語① 視線② 視線① 最終話題の完了 <b>【前終結】</b>
02	T T 視 SA 視	<b>さあ(.) 今日の内容は(.) え:ここまで::になります (1.11)</b> >教材-----> >机----->	終結宣言 (明示的) <b>【終結開始】</b>

断片①は、日常会話の「前終結」に関する先行研究で指摘されたものと同様の事例である。すなわち、「終結」の直前に、「これ以上言いたいことがあるかどうか」を確認し、終結への意向（メタメッセージ）を交渉する場が設けられているものである。



この断片を大掴みに説明すると以下ようになる。教師は最終話題を終えた後、学生たちを見回しながら、「OK ですね？」という質問をしてから、2秒の間合いを置くことによって、学生に、ここまでのやり取りに関して「何か理解できていないことがあるか」を確認している (01 T と T 視)。この確認は決められた授業の終了時間に非常に近い時点で行われているので、問題がなければ授業は終了するという事は教師にも、学生にも了承されている。それに対して、発話機会が明示的に付与される学生は、沈黙及び教師へ視線を投げないことによって、発話順番をパスし、「問題がない」、「終結へと進むことに同意」というメタメッセージを教師に伝えている。それから、教師は「さあ」というマーカーを使用し、「前終結」を完了させ、授業を終結へと向かわせる。

この断片の教師の発話デザインに類似する事例は、居關 (2017) が観察している制度的場面である「実習反省会」の「前終結」の部分にも出現している。このような発話デザインに関して、居關 (2017) は「話題の導入機会を与えているこの発話は、質問の形式が用いられ、隣接ペア<sup>15</sup>の第一成分として組み立てられている。それによって、第二成分の産出が適切となる次の順番がその機会であることが明示される<sup>16</sup>」と述べている。

#### 4.2.1.3 日常会話の「前終結」と異なる事例

断片② 学生の意向表明の機会が明示されない「前終結」(授業 B)

説明：教師は教卓の裏側に立っている		資源	構成要素	
01	T	{はい(0.15)じゃあ今日は:(0.4)この(.)まあ(.)みなさんの=	言語③	全体のめとめ 【前終結】
	T 視	>教卓においてある教材 ----- 黒板 ----- 右 Ss----->	視線③	
	SA 視	>T or 机 ----->	視線②	
	T	= (0.19)少年時代?(.)少女時代の夢ですね(0.14)少し(.)考え=	言語③	
	T 視	>----- 左へ,,,,,,左 Ss,,, 右へ,,真ん中 Ss>	視線③	
	SA 視	>T or 机 ----->	視線②	
	T	=ました ((中略11秒)) そういう練習もしました (0.88)	言語③	
	T 視	>----- (( 中略 )) 教卓においてある教材 ----->	視線③	
	SA 視	>T or 机 ----->	視線②	
02	T	{じゃあ今日の授業は(.) <ここまでにしましょう> (0.2)	終結宣言 (明示的) 【終結開始】	
	T 視	>教材 ----->		
	SA 視	>T or 机 ----->		
	Ss 身	*教材を捲る ----->		

断片②において、断片①のような、授業を終結させることへの同意や非同意の交渉を行う場が設けられていない。教師は01でその授業の全体的なまとめをした後、即座に「じゃあ」というマーカーを使用し、授業の「終結」を開始した(02)。しかも、「前終結」から「終結」への移転に際して、学生を目視しておらず、学生の反応を確認していなかった。この断片では、教師はマーカーの使用を通じて一方的に授業を「終結」へと向かわせ、学生側はそれに応じていると言える。

終了部に生じる「じゃ／じゃあ」の機能について、熊取谷(1992)は「談話の『後方志向の区切り標識』として機能し、前段終結、最終発話交換へ移行或いは前段終結内での移行を先導する役割を果たす」と述べている。断片②においても、「じゃあ」は「後方志向の区切り標識」という機能を果たし、「授業全体のまとめ」から「終結」への移行場を作り出している。また、「じゃあ」だけではなく、同位置に生じる「はい」、「さあ」、「では」等の他のマーカーも同様の機能を持つと思われる。

断片③ 学生の意向表明に従わない「前終結」(授業E)

説明：ベルが鳴る1分38秒前からの断片である。この断片の前から、学生は文を作る(書く)練習をしている。教師は教室を回って、学生が書いているものを見ている。		資源	構成要素	
01	T	じゃあ皆さん大体書きましたか。(.){書きましたか}? (0.23)	言語②	最終活動 の完了 【前終結】
	T 視	>Ss,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,教卓の方----->	視線①	
	T 身	*教室内の通路から教卓の方へ行く----->	身体①	
	SA 視	>机----->	視線①	
	SA 身	>まだ書く練習をしている----->	身体②	
02	T	え::宿題なんですが:【後略】	授業後の作業 への言及 【終結開始】	
	T 視	>教卓の方-----【後略】		
	T 身	>教卓の方へ行く-----【後略】		
	SA 視	>机-----【後略】		
	SA 身	>まだ書く練習-----【後略】		

断片③において、断片①と同じように、教師は「書きましたか」という質問を2回重ねることを通して、学生の意向表明の場を作った(01 T)。それに対し、学生は文を書く練習を続けることによって、この授業活動をまだ完

了させていない意思を表明している (01 SA 身)。それにもかかわらず、規定される終了時間が近づいているため、教師は学生の意向表明に反して、「え.:」というマーカーを使用してから、一方的に宿題の話題を切り出し、授業を終結に導いた。

#### 4.2.1.4 日本語授業の「前終結」に関するまとめ

上記の事例から、授業の「前終結」の完了に用いられる手続きには主に2つのパターンが存在することが分かった。1) 日常会話場面の「前終結」と同様のパターン:最終話題や活動が収束を迎えたと感じた時点で、「終わりにしてもいいか」というメタメッセージを相手に伝え、相手に発話権を与え、交渉の場を作り出す。相手から終結への合意が得られれば、相互行為を「終結」へと向かわせる。2) 日常会話場面の「前終結」と異質のパターン:終結の直前で終結に対する合意を確認し合わず、あるいは他の参加者の意向表明に反し、参加者の一方が「後方志向の区切り標識」を使用して移行場を作り出し、相互行為を終結に向かわせる。このうちの2つ目のパターン(断片②と③)は、とりわけ「制度」——「身分の非対称性」、「時間的規定」などの要素に影響され、制約が加えられたものと思われる。

#### 4.2.2 「終結」のプロセス

前節において、授業の主要部から終了部への移行場である「前終結」に用いられる手続きを検討した。本節では、授業の終了が成功した事例と中断される事例を取り上げ、「前終結」の完了から「最終発話交換」までのプロセスにおける参加者が用いる手続きに関して分析する。

断片④ 成功した「終結」の例(授業A)

説明:教師は教卓の横に立っていて、「目覚まし時計」等の語を例として、「連濁」という言語現象を説明している。				
01	T	【前略】(.) 2つの語が繋がって> (.) いいですね? (1.48)	最終話題 の完了	前終結
	T 視	> 前 Ss----- 教卓----->		
	T 身	* 教卓の裏に戻る ----->		
	SA 視	> 教材----->		

02	T	さあ今日はえ :: (0.16) 時間が来ましたので (.) これで終わります (.) え : {オーバーした (.) 時間オーバーしました} (0.7)	終了宣言 (理由提示)	終結
	T 視	>----- ----- 左手に持つ教材 ----->		
	T 身	>----- 教壇においてある携帯で時間をチェック ----- - 教壇の横へ行く ----- 教壇の横に立つ*		
	SA 視	>徐々に up-T----->		
03	T	え :: 皆さん (.) え :: お疲れさまでした	礼儀的 決まり 文句	
	T 視	>教材----- 前 Ss----- 教材 -->		
	T 身	《教具などを片付け始める		
	SA 視	>時々 T へ、時々机へ----->		
	SA 身	*教材などを片付け始める ----->		

断片④において、「前終結」から「終結」にわたって、教師は発話順番を取得し続けている。だが、この一連の発話は実は「さあ」、「え ::」というマーカーによって、異なる局面に構造化されている。学生はその間、言語的発話はしていないものの、各局面の教師の行動に応じる振る舞いを通して、授業終了への志向を示している。

まず、終結への意向を交渉する場が設けられている「前終結」(01)が完了した後、教師は02で「さあ」というマーカーを使用し、それ以降のやり取りを授業の主要部から切断した。それに応じて、学生は視線を主要部でのやり取りの道具である「教材」から教師へと移し始めた(02 SA 視)。この視線は、授業の終結へと向かわせる教師のメタメッセージを受け入れることを意味している。それから、教師は「時間オーバーした」という、授業を素早く終了させなければならない理由を提示(02 T)してから、授業の「最終発話交換の第1成分」としてよく使用されている「お疲れさまでした」という「礼儀的決まり文句」で、授業を終わりにしようとした(03 T)。学生はそれに応じて教材などの学習用具を片付けはじめ、終了への同意を示した(03 SA 身)。

授業の「終結」に際し、主導する側は教師であるが、学生による各局面における教師の行動への同意を示す非言語行動も不可欠だと思われる。このことは以下の断片⑤で確認できる。



され、終了部は03まで拡張されたのである。

03において、教師は宿題に関する補足を終え、学生の理解を確認するために、2回「ね」を重ねてから、3秒の間合いを置くことによって、学生の応答の場を設置した。その間、学生は教師の補足した内容をメモしていて、「理解できていない」という非言語行動が現れていなかった。それで、教師は学生の注意を引くために、両手を口の横に当てる——「大きい声を出して話す」というイメージを持つ動作をしながら、次回の授業について一言触れて、授業を正式に終了させた。学生もその後、教材などを片付けはじめ、授業の終了に同意する姿勢を示した。

この断片から、授業の「終結」に際して、教師は学生の非言語行為から情報を得て、いつ授業を終えることが適切なのかを判断していることが確認された。

## 5 おわりに

以上の通り、本稿では、制度的場面である日本語授業の終了部に関して、マルチモーダルな視点から分析を行った。その結果、主に以下のようなことが分かった。

1) 日本語授業の終了部は2段階構造を持ち、「前終結」と「終結」に分けられている。また、この2段階の構成要素はある程度定式化されている。

2) 「前終結」においても、「終結」においても、主導する側は教師である。教師は様々な言語・非言語資源を用いて、学生との相互行為を終了へと導き、学生側は様々な非言語資源を使用して、教師の終結への意向に対する同意・非同意を表明する。

3) 授業の主要部と終了部を連結する移行場である「前終結」において、教師が使用する手続きのパターンは主に2つある。1つは学生の終結への意向を確認するための交渉の場を作り出すパターンで、もう1つは直接「後方志向の区切り標識」を使用して、一方的に学生との相互行為を終結に向けるパターンである。前者は日常会話の「前終結」に類似するものであるが、後者は日常会話とは異質なものであり、「制度」の影響が明らかである。

4) 「終結」という部分は、教師の様々な「マーカ―」の使用によって、異なる局面に構造化されている。教師は各局面における学生の非言語行為を手がかりに、授業終了の進捗状況を適宜調整できる。また、2.2で述べた通り、

Clark & French (1981) は日常会話における「終結」を「reaffirmation of acquaintance (人間関係の再確認)」という機能を持つ部分としているが、本稿における授業の終了部に対する観察から考えると、制度的場面の「終結」は「人間関係の再確認」の機能が弱められ、むしろ「制度の再確認／再強調」の場だと思われる。というのも、授業の「終結」において行われること、例えば、「宿題を課する」「学生を労う」「次回の授業内容を予告する」などは全て、教育という目的に応じるために定式化される、参加者の非対称の関係性を想起させる行為だからである。このような行為は授業を「公式の場」として構築することに貢献していると思われる。

最後に、本稿の不足している点について述べておきたい。本稿は制度的場面における相互行為の終了の仕組みを明らかにしようとするものであるが、制度的場面にも様々な状況があるので、「日本語授業」だけを対象とする考察は不十分である。今後は、異なる制度的場面を取り上げ、多様なデータの文脈を比較・検討したいと考えている。

## 注

<sup>1</sup> 何らかの公的組織に所属する専門家（医師、教師、法律家など）が一般人（患者、生徒、証人・被告・原告など）との間で交わす相互行為には、専門家と一般人という立場の非対称性、遂行されるべき明確な職務の存在など、日常会話とは顕著に異なる特徴がみられる（串田・平本・林 2017:274）。このような日常会話とは異なる特徴を持つ相互行為が行われる場面は制度的場面と呼ばれる。

<sup>2</sup> ある相互行為を、その前後の出来事から境界づけられた1つのまとまりとして認識可能にし、その内側で生じるべき行為・活動やその順序を構造化している組織のことである（串田・平本・林 2017:259）。

<sup>3</sup> 「pre-closing」の訳語は、「前終結」、「前終結の声明」、「前終結句」、「前段終結」、「前段終結部」、「前駆終結」、「お膳立て」、「先終了句」、「終了準備」など様々ある。また、「pre-closing」は、正確には「possible pre-closing（前終結となる可能性のある部分）」と呼ばれるべきである。なぜかという点、「pre-closing」の後に、何かのきっかけで話題が再開し、会話が終結部に入らない場合もあるからである。

<sup>4</sup> 最終発話交換 (terminal exchange) とは、Schegloff & Sacks (1973) が提出した概念で、「さようなら-さようなら」といったような、習慣的な成分からなる「隣接ペア (adjacency pair)」であり、相互行為を終了させる瞬間を作り出す手続きである。「隣接ペア (adjacency pair)」とは、2名の話者が発するそれぞれ1つの発話からなるものである。隣接ペアにおける1つ目の発話は「第1成分 (First Pair Part: FPP と略す)」、2つ目の発話は「第2成分 (Second Pair Part: SPP と略す)」と呼ばれる。

- <sup>5</sup> Schegloff & Sacks (1973) の「pre-closing (前終結)」に当たるものである。
- <sup>6</sup> 例えば、「再接触の約束」や「相手に対する励まし」などのやりとりを行うことを通して、相手との良好な人間関係を将来にわたって維持していきたいという意思を示しあうことが挙げられる。
- <sup>7</sup> 李 (2017) などがある。
- <sup>8</sup> 服部 (2016;2015;2011;2009;2008)、高木 (2005)、尾崎 (2003)、鄧 (2002)、林 (2002)、伊藤ら (2001)、林 (2001)、金 (1998)、藤原 (1998)、岡本・吉野 (1997)、今石 (1992)、小野寺 (1992)、熊取谷 (1992)、岡本 (1990) などがある。
- <sup>9</sup> 大谷 (2018)、居關 (2013)、永田 (2011)、楊 (2007)、中井 (2004;2003)、大浜 (1997) などがある。
- <sup>10</sup> 広田ら (2002) などがある。
- <sup>11</sup> 佐々木 (2010) などがある。
- <sup>12</sup> 居關 (2017) などがある。
- <sup>13</sup> 本稿では、紙幅上の理由で、{ } の中に、発話された中国語の日本語訳だけを記述する。なお、言語的資源の表記記号のうち、この記号のみ作者が作成した。
- <sup>14</sup> 「ディスコースマーカー (discourse marker)」の略で、「談話標識」という意味である。広義的には「相づち」や「つなぎ言葉」などが含まれているが、本稿においては、談話の局面を区切る標識を指す。例を挙げると、「はい」、「じゃ」、「では」などがある。
- <sup>15</sup> 注<sup>4</sup>を参照。
- <sup>16</sup> この点は Schegloff (1968) が指摘している「conditional relevance (条件づけられた関連性)」という概念に関係している。「条件づけられた関連性」とは、「隣接ペア」の「第1成分」と「第2成分」との強力な結び付きを指し、「第1成分」が「第2成分」産出のための位置を用意するということの意味している。換言すれば、「第1成分」が「第2成分」の生起を条件づけるということである (申田・平本・林 2017:80)。断片①において、教師の「質問」は「隣接ペア」の「第1成分」であり、「応答」を引き出す行為として行われている。すなわち、「質問」の直後の位置に「応答」という行為 (第2成分) が産出される機会 (断片①の場合は意見を言い出す機会) が設けられている。

## 【参考文献】

- 居關友里子 (2017) 「制度的場面における会話の終結に関する一考察：実習反省会の観察から」『国立国語研究所論集』13. 国立国語研究所. pp.51-64
- 居關友里子 (2013) 「会話と活動の関係から見る会話終結：日常追跡法による大学生の会話を中心に」『ヒューマン・コミュニケーション研究』41(0). 日本コミュニケーション学会. pp.17-38
- 伊藤明子・杉山ますよ・八若寿美子・藤井桂子 (2001) 「子供の電話会話における終結部の分析：成人との比較から」『言語文化と日本語教育』21. お茶の水女子大



- 学日本言語文化学会. pp.45-57
- 今石幸子 (1992) 「電話の会話のストラテジー」『日本語学』11. 明治書院. pp.65-72
- 大谷麻美 (2018) 「話題の終結と開始のための相互行為—マルチモダリティの観点からの分析—」『社会言語科学会第42 回大会発表論文集』. 社会言語科学会. pp.137-140
- 岡本能里子 (1990) 「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72. 日本語教育学会. pp.145-159
- 小野寺典子 (1992) 「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応答」『日本語学』11. 明治書院. pp.26-38
- 大浜るい子 (1997) 「日本語による会話終了のメカニズム解明のための予備的考察」『広島大学教育学部紀要 第二部』46. 広島大学教育学部. pp.159-167
- 岡本能里子・吉野文 (1997) 「電話会話における談話管理—日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析」『世界の日本語教育』7. 国際交流基金日本語国際センター. pp.45-60
- 尾崎明人 (2003) 「接触会話の研究から会話の教育へ—電話会話の終結部に見られるコミュニケーション問題を中心に」宮崎里司, ヘレン・マリOTT (編)『接触場面と日本語教育: ネウストブニーのインパクト』明治書院. pp.69-84
- 金敬善 (1998) 「電話会話における終結部展開の韓日対照: 主要部と終結部のかかわりを中心に」『大阪女学院短期大学紀要』28. 大阪女学院短期大学. pp.45-70
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017) 『会話分析入門』勁草書房
- 熊取谷哲夫 (1992) 「電話会話の開始と終結における『はい』と『もしもし』と『じゃ』の談話分析」『日本語学』11. 明治書院. pp.14-25
- 佐々木泰子 (2010) 「接触場面と母語場面—体験談の終結部から見たその特徴」『言語文化と日本語教育』39. お茶の水女子大学日本言語文化学会. pp.33-40
- 坂本真一 (2017) 「話段からみたドイツ語の試験会話中間部の展開パターンと話段の終了一統語・音声・語用論的完了に注目して」『麗澤大学紀要』第100巻. 麗澤大学. pp.73-82
- 高木智世 (2005) 「社会的実践としての日常会話—電話会話の終了に関わるプラクティスを例に」『論叢』1. 筑波大学人文社会科学科現代文化・公共政策専攻. pp.143-175
- 鄧開蜀 (2002) 「日・中電話会話終結部に関する一考察—「好」「那」「就這 [ヨウ]」を中心に」『千葉大学日本文化論叢』3. 千葉大学文学部日本文化学会. pp.66-51
- 中井陽子 (2003) 「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16. 早稲田大学日本語研究教育センター. pp.71-95
- 中井陽子 (2004) 「話題開始部/終了部で用いられる言語的要素—母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合」『講座日本語教育』40. 早稲田大学日本語研究教育センター. pp.3-26

- 永田良太 (2011) 「会話教育のための談話分析：会話の終結に着目して」『第二言語としての日本語の習得研究』14. 凡人社. pp.5-19
- 服部明子 (2008) 「ビジネス場面における電話会話終結部の分析 -- 中国語を母語とする日本語学習者 (JFL) のクレームへの応対を中心に」『日本語教育』138. 日本語教育学会. pp.63-72
- 服部明子 (2009) 「電話会話における日本人ビジネス関係者のクレームへの応対」『言葉と文化』10. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻. pp.77-93
- 服部明子 (2011) 「中国人ビジネス関係者の電話会話終結部の分析：クレーム場面のロールプレイ会話を通して」『言語文化と日本語教育』41. お茶の水女子大学日本語文化学研究会. pp.30-39
- 服部明子 (2015) 「ビジネス場面におけるクレーム電話会話終結部の分析：中国人と日本人の比較を通して」『三重大学教育学部研究紀要』66. 三重大学教育学部. pp.67-75
- 服部明子 (2016) 「ビジネス場面の会話データを利用した日本語教育への応用」『三重大学教育学部研究紀要』67. 三重大学教育学部. pp.77-86
- 広田妙子・馬場真知子・小熊貞子・木原郁子・越前谷明子 (2002) 「会話の機能と内容からみた終結部の特徴に関する研究」『多摩留学生センター教育研究論集』3. pp.83-88
- 藤原智栄美 (1998) 「電話会話における終結部構造の日米比較」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』2. 大阪大学. pp.1-15
- 林美善 (2001) 「電話会話の終結部に現れる日韓の相違に関する一考察：日韓の20代の親しい友人同士の電話会話から」『言語文化と日本語教育』22. お茶の水女子大学日本語文化学研究会. pp.78-91
- 林美善 (2002) 「電話会話における終結部研究の動向：日米・日韓を比較した研究を中心に」『言語文化と日本語教育』増刊特集号. 日本語文化学研究会. pp.236-244
- 李涓丞 (2017) 「スマートフォンチャットの終結部の日韓対照研究：構成要素と展開パターンを中心に」『言語文化と日本語教育』52. お茶の水女子大学日本語文化学研究会. pp.1-10
- 楊虹 (2007) 「中日母語場面の話題転換の比較 -- 話題終了のプロセスに着目して」『世界の日本語教育』17. 国際交流基金日本語事業部. pp.37-52
- Clark, H.H. & French, J.W. (1981) Telephone goodbyes. *Language in Society* 10, pp.1-19.
- Hakulinen, A. (2009) Conversation types. In S.D 'hondt & J.Östman & J.Verschueren (eds.) *The Pragmatics of Interaction*, pp.55-65. Amsterdam:Benjamins.
- Jefferson, G. (2004) Glossary of transcript symbols with an Introduction. In G.H. Lerner. (ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, pp.13-31. Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins.

- Mondada, L. (2007) Multimodal resources for turn-taking: Pointing and the emergence of possible next speakers. *Discourse Studies* 9(2), pp.194–225.
- Schegloff, E.A. (1968) Sequencing in conversational opening. *American Anthropologist* 70(6), pp.1075–1095.
- Schegloff, E.A. & Sacks, H. (1973) Opening up closings. *Semiotica* 8, pp.289–327.

### 【付記】

本研究は中国国家留学基金・日本政府（文部科学省）留学生奨学金の助成を受けたものである。